T-TAC/PEPNet-Japan 2009年度アメリカ視察報告

今回の視察を通して ～参加者からのつぶやき～

筑波技術大学　障害者高等教育研究支援センター　白澤　麻弓
蓮池　通子
石野麻衣子

１．最終回に寄せて

T-TAC/PEPNet-Japan 2009 年度アメリカ視察報告の連載も今回で最後となりました。最終回は、視察参加者のみなさんから、今回の視察を通して感じたこと、考えたことなどを、Twitter 風につぶやいていただきました。それぞれのつぶやきを通して、これまで 5 回の報告を振り返り、まとめとさせていただきます。

２．参加者のつぶやき

国立障害者リハビリテーションセンター学院・手話通訳学科は、アメリカの語学教授法や通訳養成プログラムを参考にしたカリキュラムを編成しスタートしました。以来 20 年間、研究を重ねてカリキュラムの充実を図ってきましたが、アメリカはさらに先に進んでいました。今回の視察で得られたものは早速当学院のカリキュラムへの導入を進めていますが、いつまでも教わるだけでなく、いつかはわたしたちのカリキュラムが他国の参考とされるように今後も研鑽を続けたいと思っています。（木村晴美氏）

何より衝撃的だったのは、手話通訳がしっかりした職業になっていることでした。そのため養成・研修プログラムはより充実し、さらに質の高い通訳者が輩出されるという良い循環になっています。権利意識の高い国ならではのことかと思いますが、仕事・養成・法制度が三位一体となって大きな成果を作っているのでしょう。ちょうど日本も法的アプローチを進めようとしているところです。日本の手話通訳界の三位一体が実現するよう頑張っていきたいと思います。（宮澤典子氏）

アメリカ視察に加えていただいて 3 回目、毎回新たな驚きと発見があります。ろうの学長がいて、カリフォルニアの青空のような笑顔でキャンパスを闊歩するろう学生。通訳者の量と質がろう者の生き方をこれほどまでに左右するということを実感する瞬間でした。日本の大学に手話通訳養成課程を作ること、そして専門職に携わるろう者とその専門通訳者を増やしていくこと目指して、日本でできることを一つ一つ積み重ねていきたいと思います。（吉川あゆみ氏）

現在群馬大学では、講義の情報保障として手話通訳がありますが、職員が担っており、近い将来聴覚障害学生の増加に伴って、学内での手話通訳養成が必要になるのではと示唆されています。自分も大学の手話通訳にかかわっていますので、視察では特に、大学での講義通訳に関するお話や手話通訳養成の様子は、大変参考になる内容ばかりでした。今後は、この大切な経験を生かすとともに、現場に結びつけていければと思っています。（中永亜貴子氏）

ノースイースタン大学の手話通訳者養成、特に手話通訳練習に入る前に徹底して手話力を身につけさせ、コミュニティに入って修行させる等のカリキュラム構成は、地域の教育力と大学におけるカリキュラムを上手く融合させた指導方法で、日本でも学ぶべきところが多いと感じさせられました。また、一つ一つの養成方法が徹底した客観的分析に基づいて組み立てられている点も「さすが！」よき研究者がよき通訳者を育てる！日本でもこんな事例を増やしていきたいですね。（白澤麻弓）

ロチェスター(NY)の先生のデマンド・コントロールと言う新しい通訳理論がコロラドの大学のカリキュラムに既に組み込まれていました。アメリカ国内で手話通訳養成に関する情報交換が活発に行われていることが伺えます。また日一英の逐次通訳の際に、メモを取りながら通訳していると、アメリカの通訳学科の先生がそのメモの取り方に関心を示されました。手話通訳はメモ書きをしませんが、「通訳学」を総合的に研究しておられるからでしょう。（高木真知子氏；日英通訳）

当初は「ボストンに行くのに美術館もボストンフィルもなしとは…」と少なからず悲観していました。しかし実際は、視察地それぞれがそんな悲観を補って余りある、この通訳でなければ得られない大きな学びの機会となりました。また、同行された日英通訳の方からも、日々の通訳についてあらためて省み、気づきを得るきっかけをいただきました。通訳の経験のみならず、このような機会をいただいたことを感謝しています。
（性全幸氏；手話通訳）

同行手話通訳としてアメリカ視察に参加しました。先進的なアメリカの現状を初めて目の当たりにして、ただただ圧倒されてしまいました。手話通訳としての自分自身を改めてみつめなおし、自己評価や通訳者としての姿勢など多くのことを身をもって学ぶ機会をいただいたと思っています。（荒井美香氏；手話通訳）

どこのカリキュラムをとって見ても、ろう者の望む通訳者像を常に確認し、そのための評価方法や内容を研究し、すぐに反映させている点がすばらしいと感じました。
（蓮池通子）

今回印象に残ったのは、どの養成で使われている通訳評価基準もきちんとした研究に基づいているということでした。“確かなもの”があるのは強いなと感じました。（石野麻衣子）

この他に、日英通訳として近藤正臣先生にご協力いただきました。ご協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

３．まとめにかえて

計 6 回の視察報告をお読みいただき、ありがとうございました。しかしながら、これまで連載でお伝えできた部分は、視察のほんの一部でしかありません。視察について、より深く内容を知りたいと思われた方は、ぜひ、「2009 年度アメリカ視察報告書」をお読みいただければと思います。

＊**附記**:本事業は文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成 19 年度～23 年度）による聴覚障害学生支援のための拠点形成事業の一部です。